

まち・ひと・しごと創生総合戦略

井手町人口ビジョン

～豊かな自然と利便性・快適性が共存する新しい町～

平成27年10月 初版

井手町

目次

1、	井手町の人口ビジョンの位置づけ	1
2、	人口動向の現状と将来展望	1
1	人口動向の現状	1
(1)	総人口と人口構成の推移	1
(2)	自然動態	3
(3)	社会動態	4
(4)	人口流動	8
2	人口の将来展望	11

1、井手町の人口ビジョンの位置づけ

井手町人口ビジョンは、国の「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」の趣旨を踏まえ、本町における人口の現状分析を行い、人口に関する住民の認識を共有し、今後、めざすべき将来の方向や人口の将来展望を示すもので、本町の地域創生計画を企画立案する上で重要な基礎となるものです。

2、人口動向の現状と将来展望

1 人口動向の現状

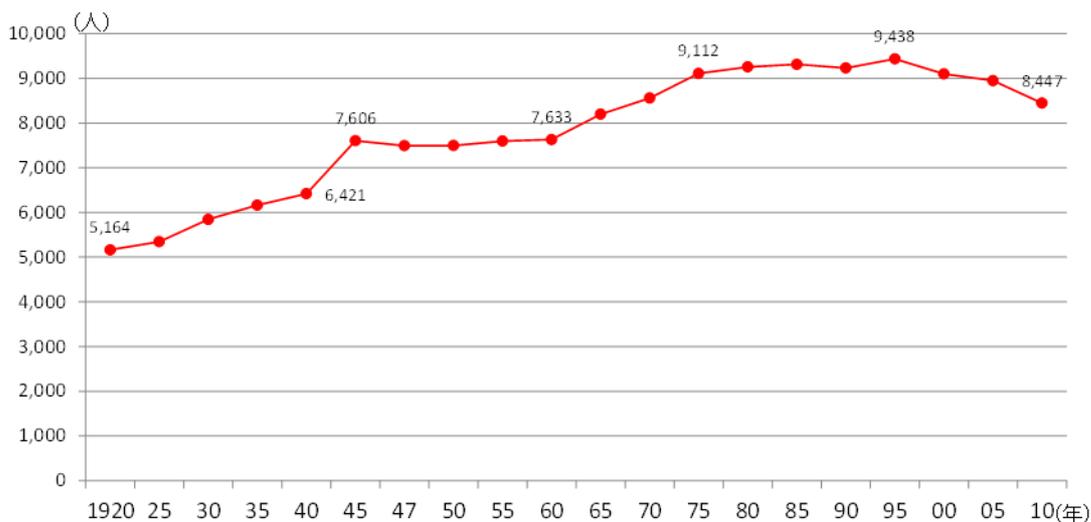
(1) 総人口と人口構成の推移

井手町の人口は1970年代（昭和45年～54年）に急速に増加し、国勢調査によると1975年（昭和50年）には9,000人を超えたが、1995年（平成7年）の9,438人*1をピークに減少に転じ、2010年（平成22年）には8,447人となっている。

住民基本台帳人口より、2000年（平成12年）以降の人口の推移をみると、2013年（平成25年）まで減少が続いており、この13年の間に総人口の1割以上に相当する900人以上の人口が減少している。

こうした人口減少とともに、人口構造の高齢化も急速に進展しており、1990年（平成2年）に12・3%であった高齢化率（65歳以上人口比率）は、2010年（平成22年）には26・3%まで上昇している。

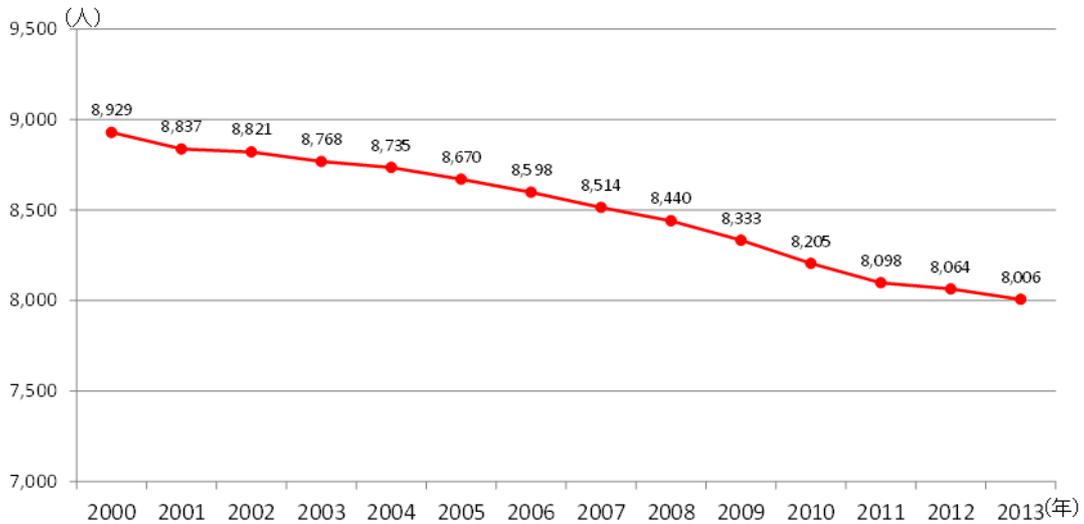
図表1 総人口の推移



(資料) 総務省「国勢調査」

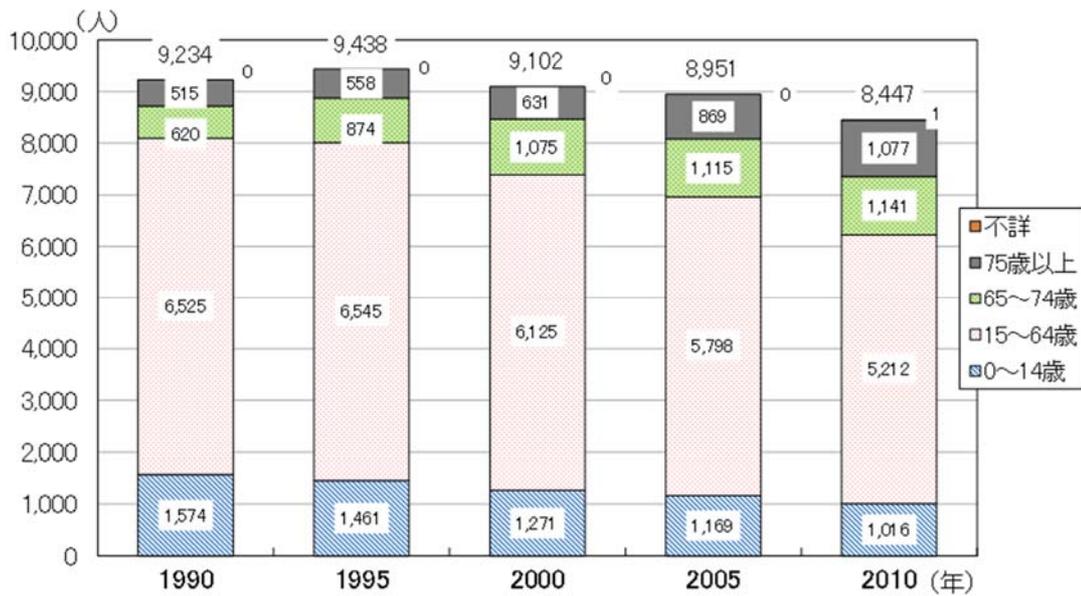
*1 住民基本台帳と外国人登録による人口のピークは、1978年（昭和53年）の9,451人

図表2 総人口の推移 (2000年～)



(資料) 井手町「住民基本台帳による人口」

図表3 年齢4区分別人口の推移



(資料) 総務省「国勢調査」

図表4 年齢4区分別人口の構成比の推移

年齢階級	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
0～14歳	17.0%	15.5%	14.0%	13.1%	12.0%
15～64歳	70.7%	69.3%	67.3%	64.8%	61.7%
65～74歳	6.7%	9.3%	11.8%	12.5%	13.5%
75歳以上	5.6%	5.9%	6.9%	9.7%	12.8%
65歳以上	12.3%	15.2%	18.7%	22.2%	26.3%

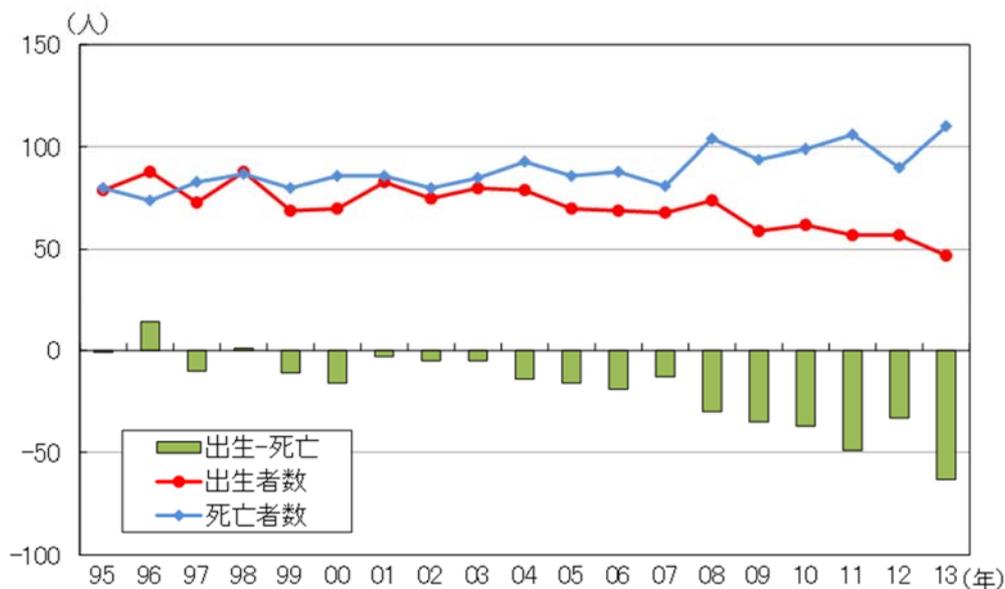
(資料) 総務省「国勢調査」

(2) 自然動態

1990年代（平成2年～11年）までは年によって多少の変動はあるものの、概ね出生数と死亡数が均衡していた。しかし、2000年代（平成12年～21年）に入ると、出生者数が徐々に減少する一方で死亡者数が増加し、死亡が出生を上回る自然減となり、減少の幅も年々拡大する傾向にある。

井手町の合計特殊出生率*2（2008～12年（平成20年～24年））は1・33で、京都府の値（2008～12年（平成20年～24年）：1・27、2013年（平成25年）1・26）を0・06～0・07ポイント上回っている。母の年齢階級別の出生率をみると、井手町では20～24歳の出生数が多い。

図5 出生・死亡者数の推移



（資料）総務省「住民基本台帳人口移動報告」

図6 合計特殊出生率

	合計特殊出生率		母の年齢階級別出生率(女性人口千対)						
	2013年	2008～12年	15～19歳	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45～49歳
井手町	—	1.33	8.2	45.5	79.3	79.5	44.6	8.4	0.2
京都府	1.26	1.27	4.0	24.5	76.6	93.8	46.1	8.6	0.2
全国	1.43	1.38	4.8	36.0	87.0	95.1	45.2	8.1	0.2

（資料）厚生労働省「平成26年人口動態統計月報年計（概数）の概況」（2013年の京都府・全国の値）、厚生労働省「平成20～24年 人口動態保健所・市区町村別統計」（その他の値）

*2 合計特殊出生率：15～49歳までの女性の年齢別出生率を合計したもので、「一人の女性がその年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数」に相当する。

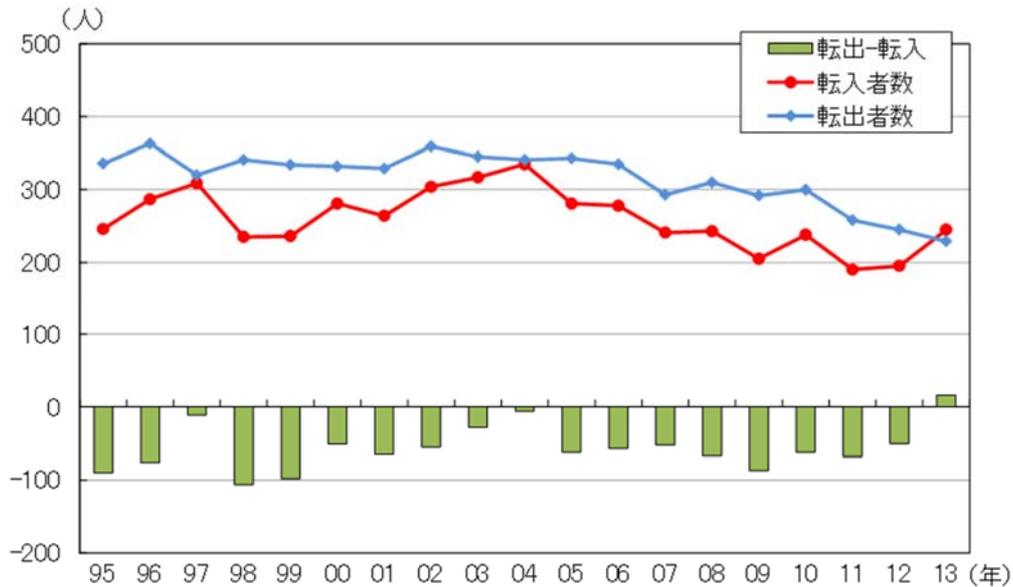
(3) 社会動態

① 概況

社会動態については、1995年（平成7年）以降、転出が転入を上回る社会減の状態が続いていたが、2013年（平成25年）については、転入者の増加によってほぼ20年振りに社会増加となっている。

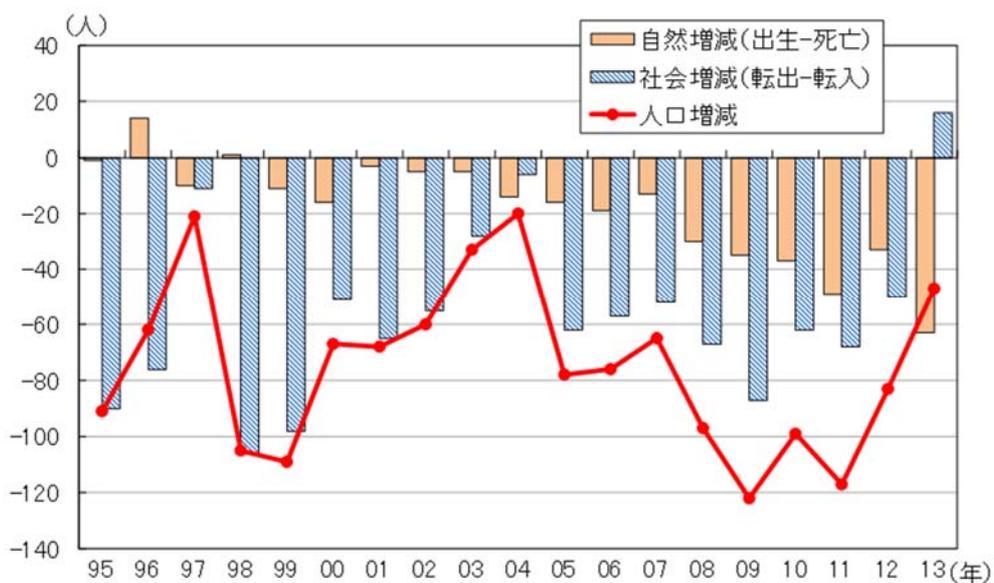
先に示した自然減と社会減の規模を比べると、ほとんどの年で社会減が自然減の幅を大きく上回り、井手町の人口減少に大きく影響を与えている。

図7 転入・転出者数の推移



(資料) 総務省「住民基本台帳人口移動報告」

図8 自然・社会増減と人口増減の推移



(資料) 総務省「住民基本台帳人口移動報告」

②転出先

国勢調査の結果から、2005～2010年（平成17年～22年）に井手町との間で転出入の多い自治体をみると、京都府内の京田辺市、城陽市、京都市、木津川市、宇治市との出入りが多いことが分かる。特に、京田辺市、木津川市については転出者数が多く30人以上の転出超過となっている。

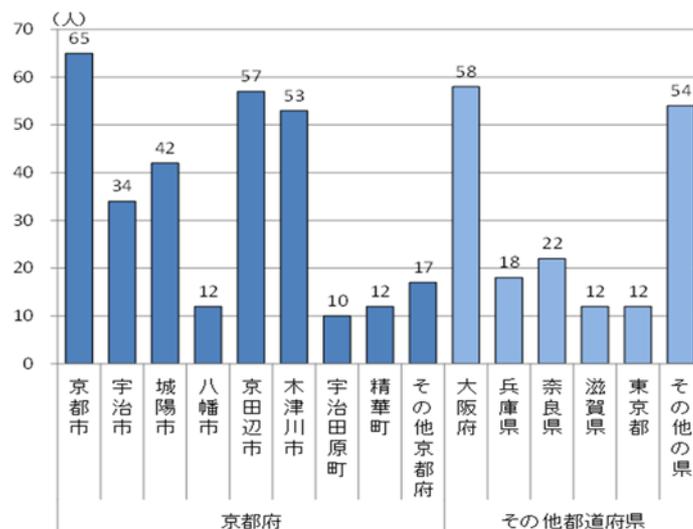
住民基本台帳の移動データ（2012・13年（平成24年・25年））からも、同様の転出傾向が確認できる。

図9 本町における転出入先の内訳（2005→2010年）

転出入先	転入	転出	転入-転出
総数	545	672	-127
京都府内他市町村	349	445	-96
京都市	69	58	11
宇治市	54	50	4
城陽市	64	62	2
八幡市	7	14	-7
久御山町	9	5	4
宇治田原町	11	17	-6
京田辺市	77	110	-33
木津川市	24	81	-57
精華町	10	33	-23
その他京都府内	24	15	9
滋賀県	14	27	-13
大阪府	44	52	-8
兵庫県	19	17	2
奈良県	45	36	9
和歌山県	3	4	-1
東京圏	18	30	-12
その他	53	61	-8

（資料）総務省「国勢調査報告」

図10 本町からの転出者数（2012・13年計）



（注）2012・2013年の2カ年間の合計値。

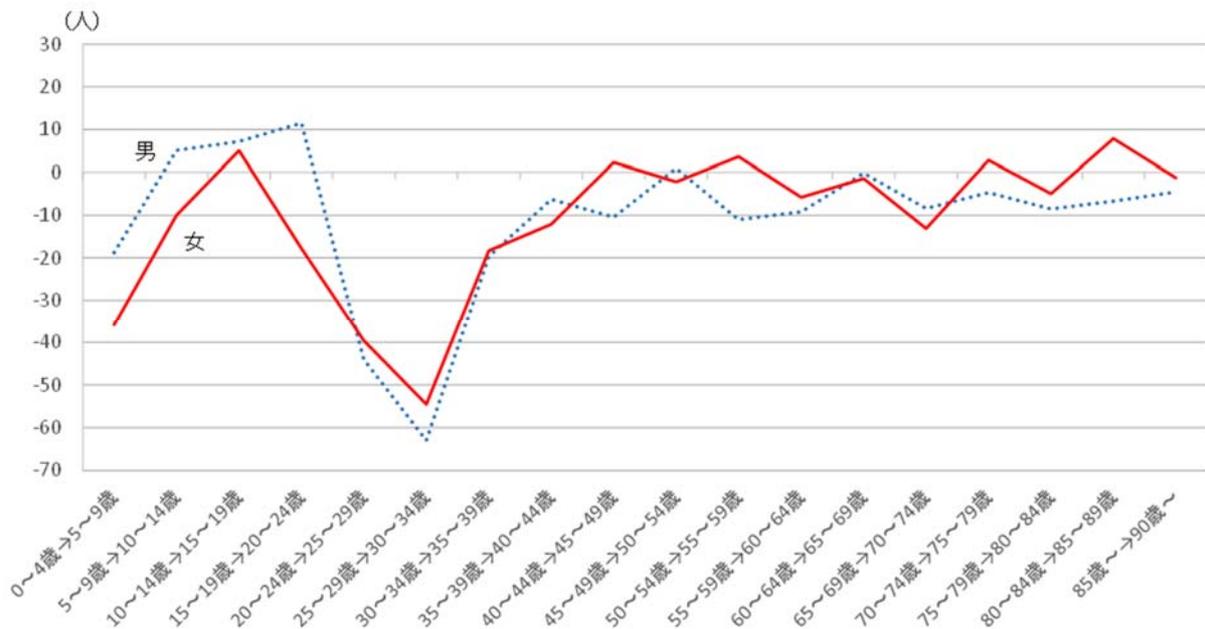
（資料）総務省「住民基本台帳人口移動報告 詳細分析表」（平成24・25年）

③年齢別の転出入傾向

年齢5歳階級別に純移動数（転入－転出）をみると、井手町では20歳代から30歳代とその子どもの世代（0～4歳）の転出超過が顕著であることが分かる。

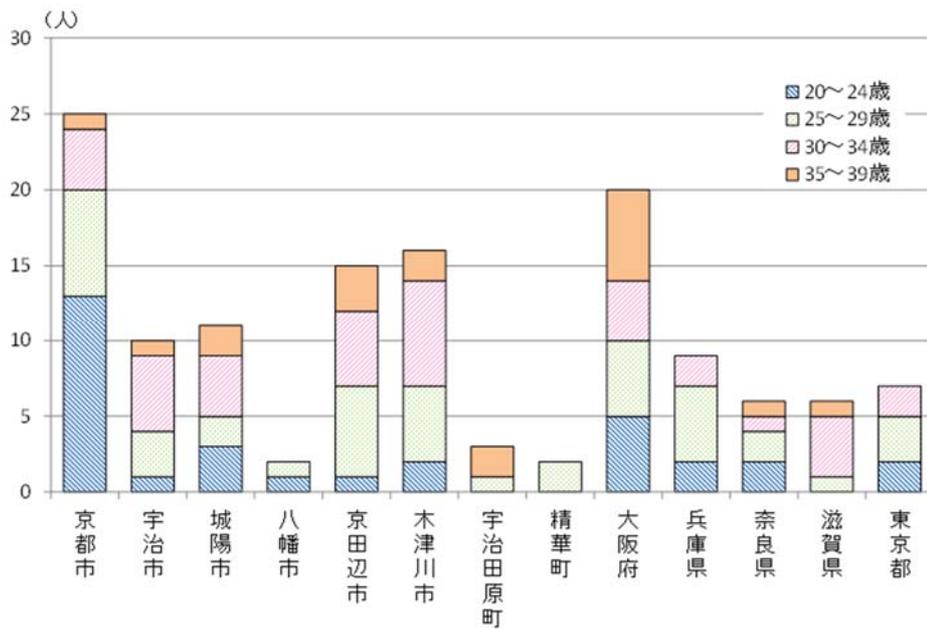
さらに、住民基本台帳の移動データ（2012・13年（平成24年・25年））から、年齢階級別の転出先の内訳をみると、特に、女性の20歳代後半と30歳代前半、男性の30歳代前半で、京田辺市、木津川市への転出が多いことが確認できる。結婚などを機に隣接する2市に転出する方が多いことがうかがわれる。

図11 本町の性別・年齢階級別の純移動数（2005→2010年）



(資料) 総務省「国勢調査」, 「住民基本台帳移動報告」より作成

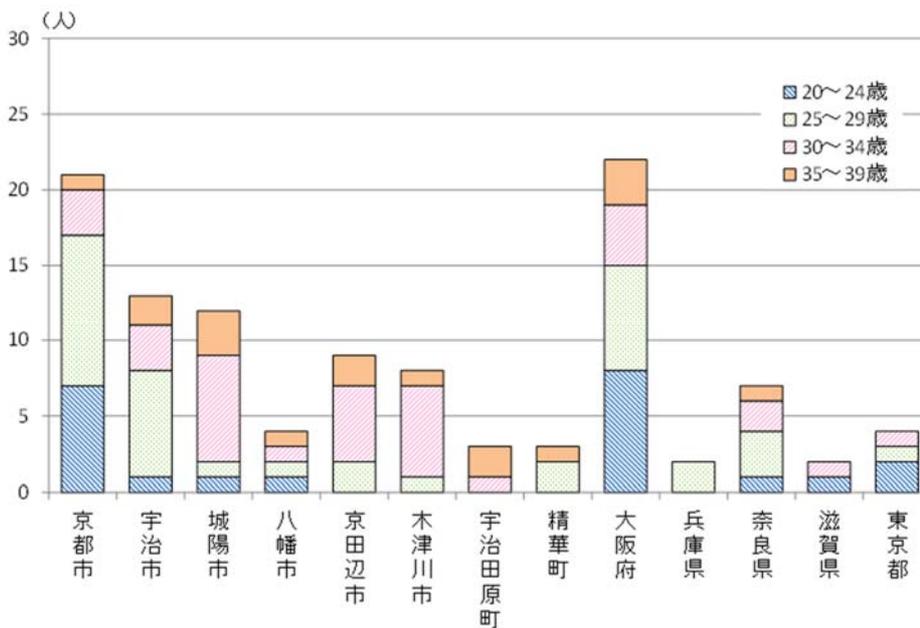
図12 20～39歳女性の井手町から転出者数（主要転出先別）



(注) 2012・2013年の2カ年間の合計値。

(資料) 総務省「住民基本台帳人口移動報告 詳細分析表」(平成24・25年)

図13 20～39歳男性の井手町から転出者数（主要転出先別）



(注) 2012・2013年の2カ年間の合計値。

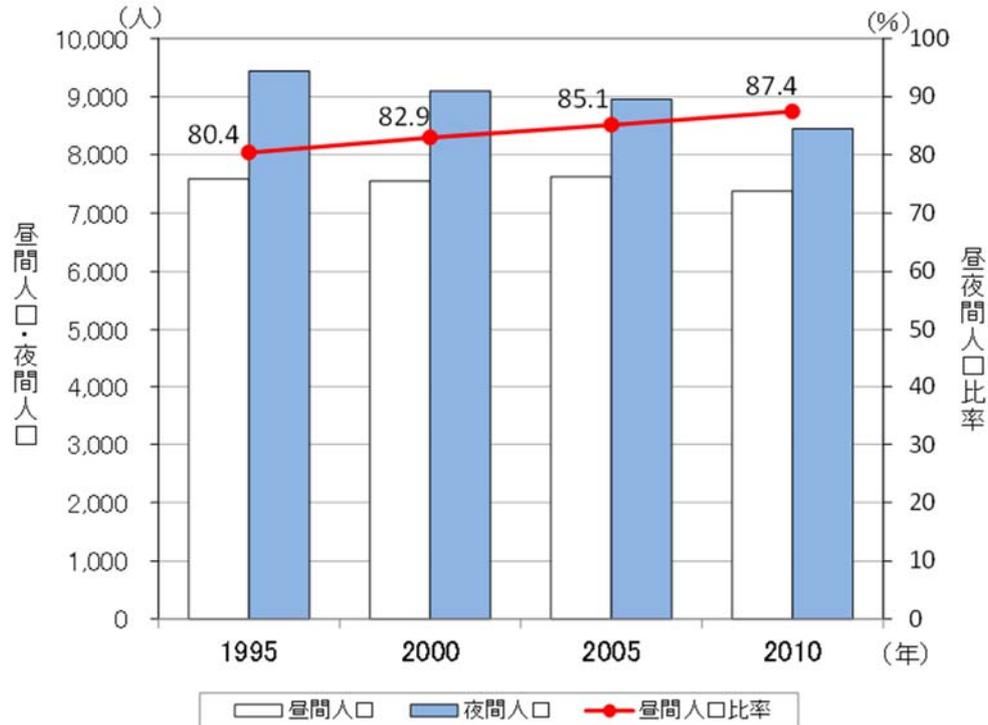
(資料) 総務省「住民基本台帳人口移動報告 詳細分析表」(平成24・25年)

(4) 人口流動

① 昼夜間人口

井手町の昼間人口と夜間人口の推移をみると、1995年(平成7年)以降、昼間人口がほぼ横ばいで推移する一方で、人口減少によって夜間人口が減少しているため、両人口の差が縮小し、昼間人口比率は1995年の80.4%が2010年には87.4%となっている。

図14 本町の昼夜間人口と昼間人口比率



(資料) 総務省「国勢調査」

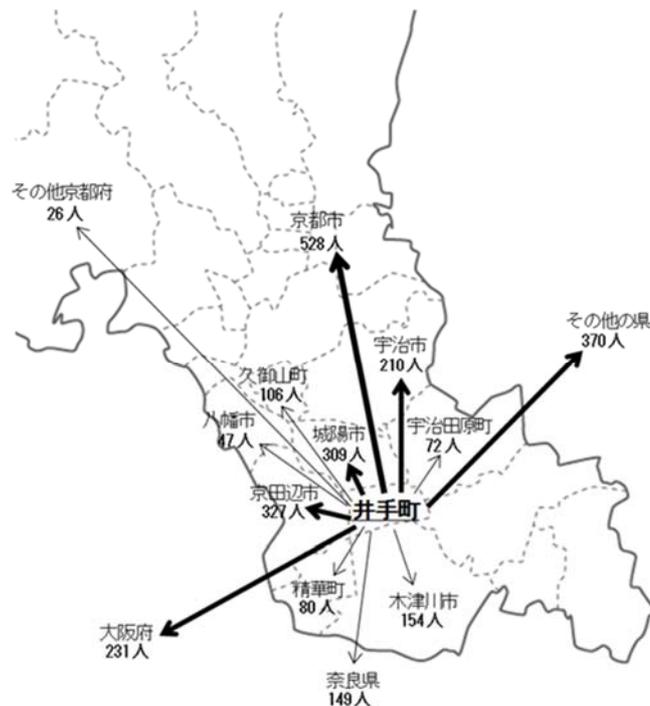
②通勤・通学

井手町に住む就業者の約6割が町外に通勤している。通勤者が最も多いのが京都市（402人）であるが、隣接する京田辺市に通勤する就業者（298人）も比較的多い。通学はほとんどが町外であるが、そのうち京都市へは126人が通学している。

次に、井手町で就業・就学している人の居住地をみると、京田辺市、木津川市、城陽市からの通勤者が多い。

図15 本町居住者の通勤・通学先（2010年）

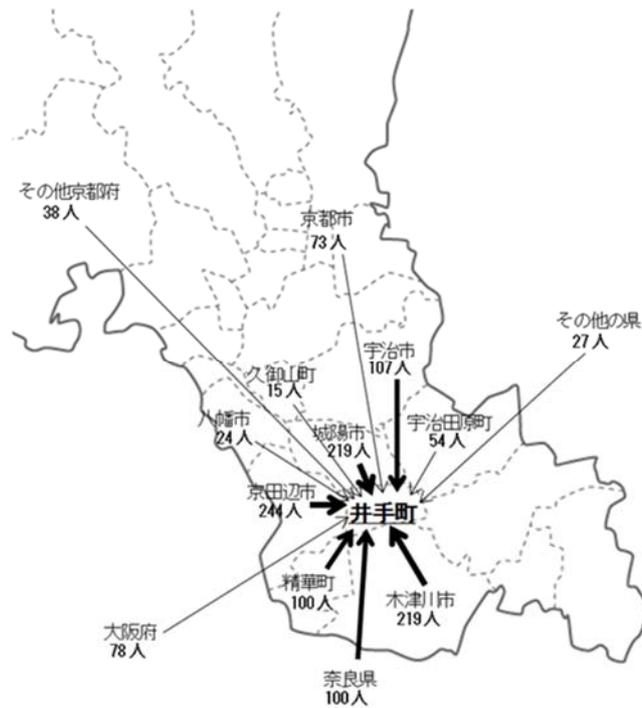
	実数			割合		
	総数	就業者	通学者	総数	就業者	通学者
井手町に常住する者	4,073	3,628	445			
井手町で従業・通学	1,416	1,384	32	34.8%	38.1%	7.2%
他市区町村で従業・通学	2,609	2,199	410	64.1%	60.6%	92.1%
(流出先)						
京都市	528	402	126	13.0%	11.1%	28.3%
宇治市	210	175	35	5.2%	4.8%	7.9%
城陽市	309	286	23	7.6%	7.9%	5.2%
八幡市	47	47	-	1.2%	1.3%	-
久御山町	106	102	4	2.6%	2.8%	0.9%
宇治田原町	72	72	-	1.8%	2.0%	-
京田辺市	327	298	29	8.0%	8.2%	6.5%
木津川市	154	133	21	3.8%	3.7%	4.7%
精華町	80	68	12	2.0%	1.9%	2.7%
その他京都府	26	24	2	0.6%	0.7%	0.4%
大阪府	231	179	52	5.7%	4.9%	11.7%
奈良県	149	112	37	3.7%	3.1%	8.3%
その他の県	370	301	69	9.1%	8.3%	15.5%



(資料) 総務省「平成22年 国勢調査報告」

図16 本町で就業・就学している人の居住地(2010年)

	実数			割合		
	総数	就業者	通学者	総数	就業者	通学者
井手町で従業・通学	3,076	2,982	94			
井手町に常住する者	1,416	1,384	32	46.0%	46.4%	34.0%
他市区町村に常住	1,298	1,296	2	42.2%	43.5%	2.1%
(流入元)						
京都市	73	73	-	2.4%	2.4%	-
宇治市	107	107	-	3.5%	3.6%	-
城陽市	219	219	-	7.1%	7.3%	-
八幡市	24	24	-	0.8%	0.8%	-
久御山町	15	15	-	0.5%	0.5%	-
宇治田原町	54	54	-	1.8%	1.8%	-
京田辺市	244	244	-	7.9%	8.2%	-
木津川市	219	219	-	7.1%	7.3%	-
精華町	100	100	-	3.3%	3.4%	-
その他京都府	38	38	-	1.2%	1.3%	-
大阪府	78	76	2	2.5%	2.5%	2.1%
奈良県	100	100	-	3.3%	3.4%	-
その他の県	27	27	-	0.9%	0.9%	-



(資料) 総務省「平成22年国勢調査報告」

※15歳以上の通勤・通学が対象

2 人口の将来展望

井手町における人口減少の要因は、自然減を上回る転出超過、社会減によるところが大きいことから、人口減少問題を克服するには、国の長期ビジョンが指摘する「出生者数」を増加させる取り組みと、転出の抑制・転入者の増加による社会減の抑制・社会増につながる積極的な戦略を、同時並行的かつ相乗的に進めていくことが重要と考えます。

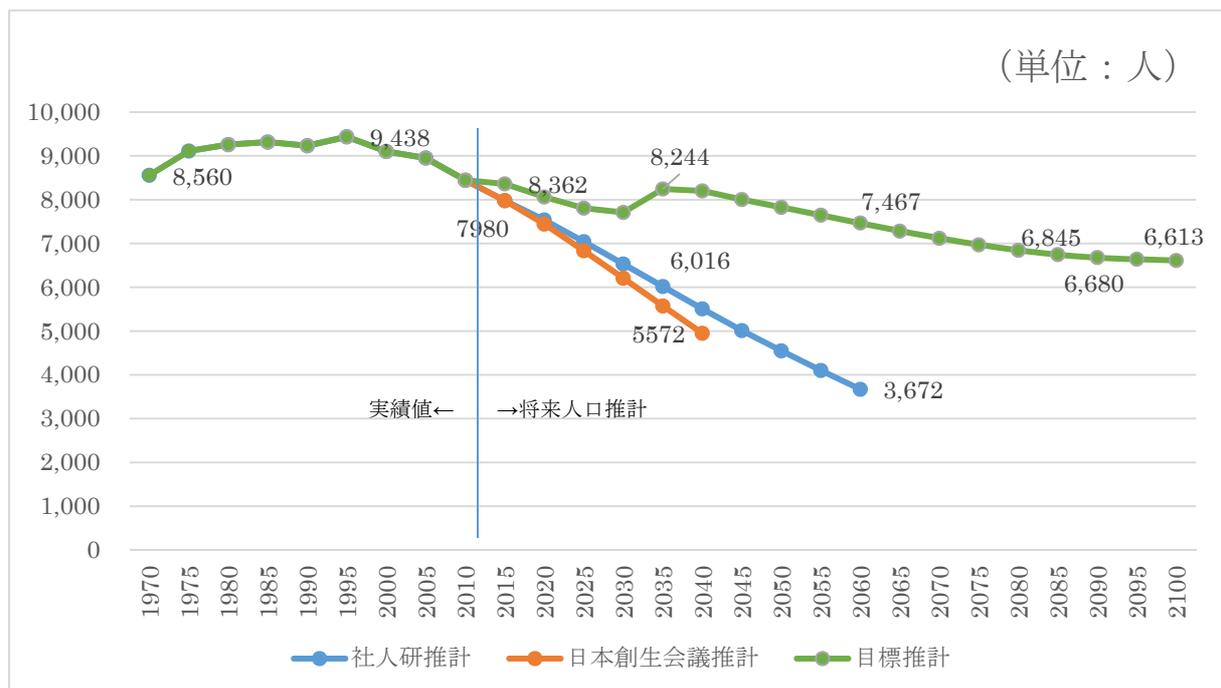
このため本町の人口の現状分析を踏まえ、人口減少問題に取り組む基本的視点として次の3点を掲げます。

- 豊かな自然環境と大都市通勤圏という利便性を両立した住環境整備
- 子育て世代や若者を中心とした生産年齢人口の転出抑制、流入・定住の促進
- 就労・雇用創出、子育て・教育を支援する生活基盤の整備

2023年度（平成35年度）には、新名神が全線開通する見通しであり、井手町を縦貫して新名神に接続する幹線道路「木津川右岸宇治木津線」についても、同時期の開通実現に向けて国に強く働きかけます。

また従来から取り組んできた人口減少対策・交流人口増加・定住促進などの事業の更なる充実・拡充を進めるほか、宇治木津線整備が本格化すれば、沿線を中心に開発適地の拡大を図るなど、2035年（平成47年）までに住宅300戸を創出するべく、新興住宅地の開発誘導や空き家の利活用を含めた定住促進策や子育て支援策を展開します。

図17 井手町の人口の将来推計



- 出生率が2020年（平成32年）に1.67程度、2040年（平成52年）に2.07程度に上昇し、以降もその状況が続いた場合を仮定しても、出生率の上昇だけでは人口減少に歯止めがかからない。
- 出生率の上昇に加えて、2035年（平成47年）までに新築、空き家の活用を含め住宅300戸が創出され、現在最も転出の多い世代が定住、または転入してきたと仮定した場合、一時的に総人口は8,000人台を回復するが、その後、緩やかな減少が続くものの2080年代以降は総人口6,000人台後半が維持される。

図18 年代別構成2015年

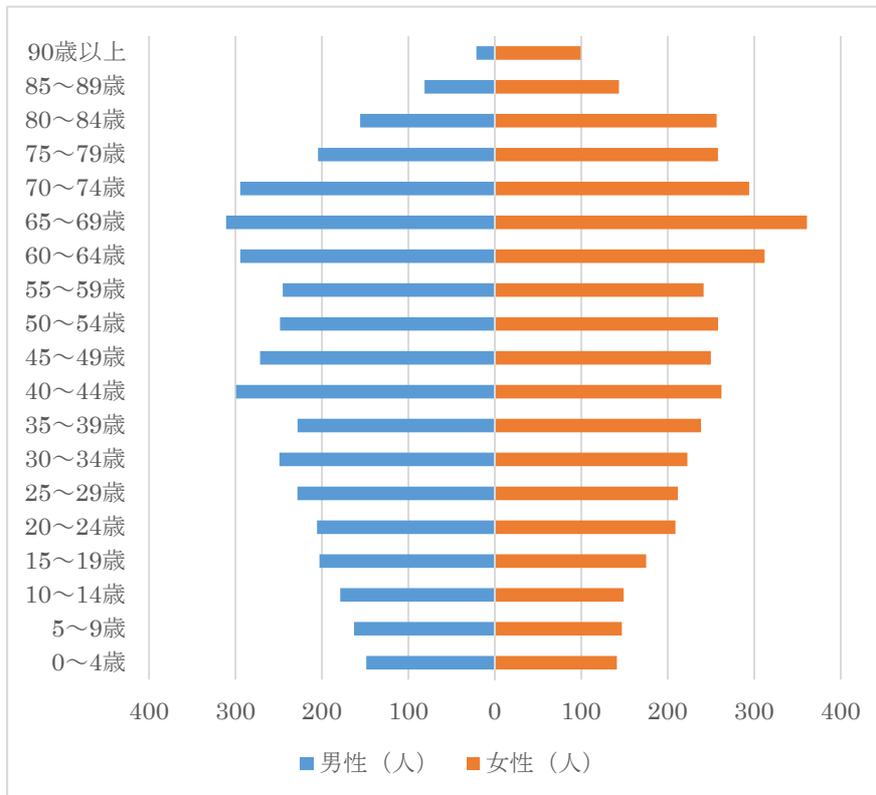


図19 年代別構成2040年

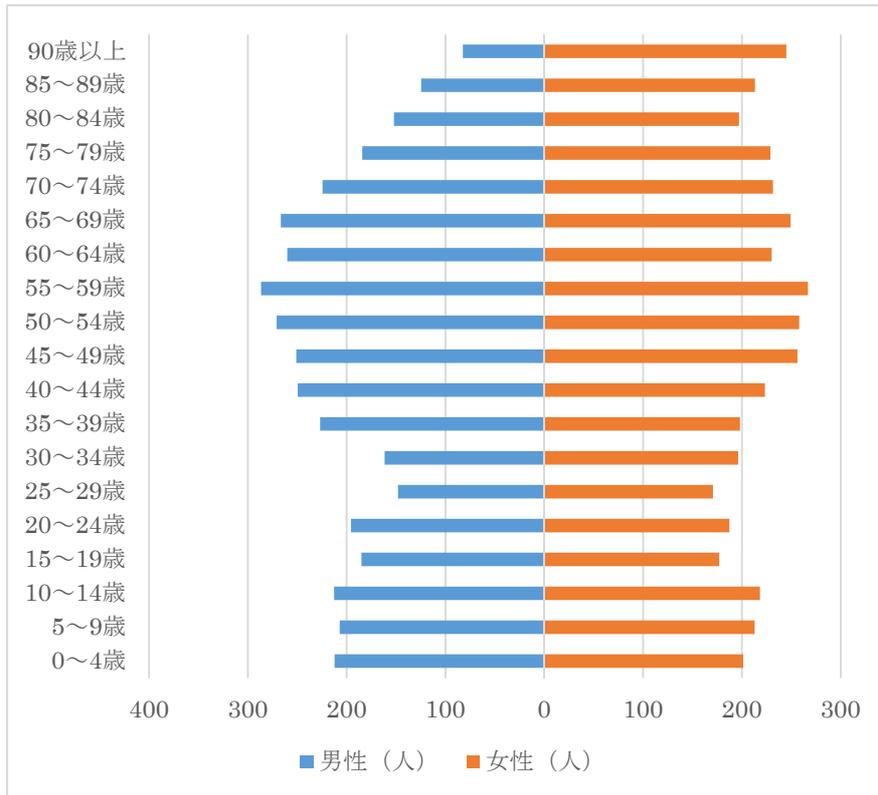
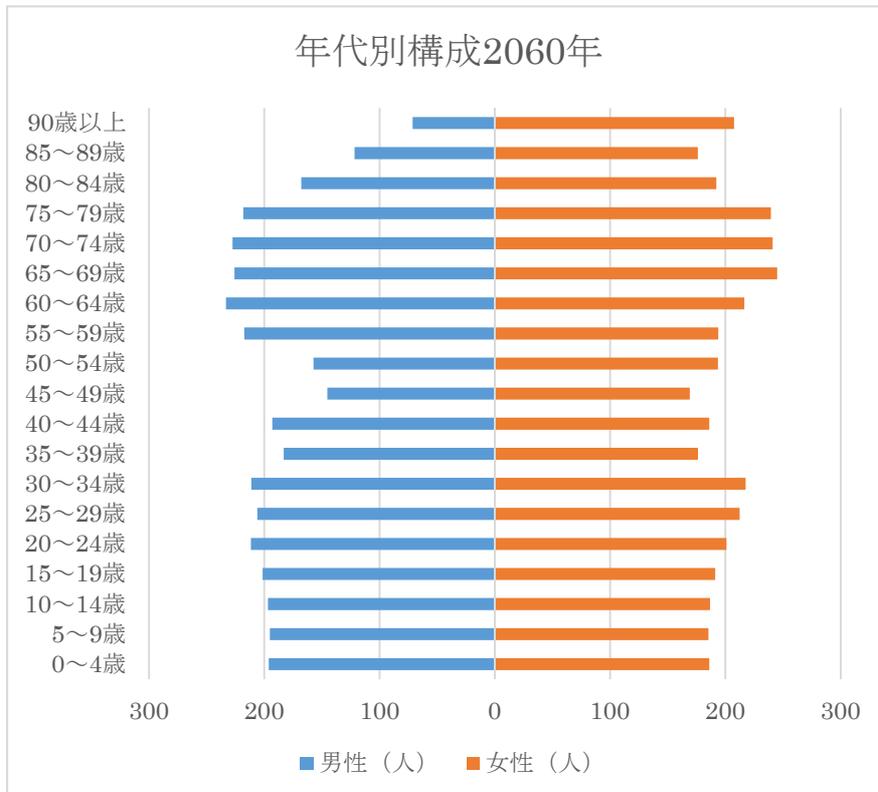


図20 年代別構成2060年



○人口の年代別構成も、徐々に改善され、各世代間の差も小さくなる。